

キーワード：大和定住促進センター、外国人支援、宗教組織

## 1. はじめに

在日外国人の増加と共に多様な支援が展開される中では、異文化理解における宗教の問題が生じる。ジュマリ (2007) は、異文化理解を宗教の問題と指摘したが、外国人と宗教の関係の検証は、多文化化する日本社会に求められる課題である。そこで本研究では、1980年代に運営された「大和定住促進センター」(以下「センター」と略記)の事例を基に、改めて外国人支援と宗教の関係を検証したい。実際にセンターに入所したインドシナ難民(厳密には難民条約上の難民ではない)の中には母国で宗教活動を行っていた僧侶の存在や、カトリック信者も存在し、信仰の場を求めている様子が確認される(大和市議会, 1991など)。

## 2. 先行研究との差異

インドシナ難民の受け入れ経緯については、中野(1993)が詳しい。また定住化に向けた政策や難民への指導・難民支援の在り方という観点からは多くの研究が蓄積されてきた(久保・瀬戸徐・乾, 2014、長谷部, 2018、荻野, 2013など)他方、伝統的に外国人支援を展開してきた宗教組織の活動については、白波瀬(2018)、高橋(2018)などによって明らかにされており、こうした先行研究から外国人支援における諸宗教組織の役割を論じたのが高橋(2022)である。一方、センター周辺地域に着目してその支援の実態について解明する、ということはあまり行われてこなかった。そこで本研究では、センター周辺地域の宗教組織の活動に着目して実態史を明らかにすることで、外国人支援における宗教の役割を改めて検討することを目的とする。なお調査にあたっては、研究倫理審査を経て関係者から聴き取り調査を実施し、当時の資料を探索するという方法を採用した。

## 3. 組織の支援活動

センターの土地はカトリック教会によって提供されたが、近隣地域の中心的宗教組織(以下「A組織」と略記)もキリスト教であり、その宗派はプロテスタントである。開設当時、所長であった難民事業本部のC氏がA組織へ開所の挨拶と支援の依頼に訪れた。その後信者による生活・日本語学習支援などがA組織を拠点として行われ、入所難民が通うようになる。さらに1985年、A組織はインドシナ難民向けの集会(以下「難民集会」と略記)を開始した(A組織, 2020)。当時の写真資料からは、数十人が礼拝に参加する様子が伺われる(A組織, 1997)。このようにA組織とつながりを持ったインドシナ難民の中には、新たに信仰を獲得する者が生じ始めるとともに、一部の難民はセンター周辺地域に定住化していった。現在ではA組織が主体となって定住難民への個別支援を引き受けている。

## 4. 考察

A組織の役割は、難民集会の実施を核としてセンター入所中から退所後まで、難民が日常的に集うことのできる拠点を提供し、地域に信頼できる日本人の存在を与えたことである。もちろん、難民全てがA組織と関わったという事実が確認できるわけではなく、その関係性は一部の難民に留まるだろう。ただ一部とはいえ、難民にとってA組織はセンター退所後の日常生活の支援だけでなく、信頼できる日本人の存在を通じて精神的な支えになっていたことを示唆している。さらに難民集会が契機となって日常的に地域の外国人が集う場となったA組織は、宗教面からの支援によって難民の地域的つながりを形成する役割を果たしており、外国人支援における固有の存在意義を示すものである。そして、センター入所後も難民たちには宗教的行為が確認され、日常的な信仰の場を求めた難民が存在した。こうした異文化を有する難民へ、宗教の視点から支援を行ったA組織の活動は、難民に異国での新たな礼拝の場を提供し、難民たちに「新たな信仰」という異国における心の拠り所を与えたものであ

ったことを示唆している。それは母国の主要宗教は仏教であったという宗教的背景を持つ難民が、一部とはいえキリスト教系宗教組織に集うようになったということである。こうした事実は、異国においても宗教を信仰しようとする難民の姿を表すものであり、外国人にとっての宗教の重要性が示されているものである。

また、センター設立に当たり土地提供を行ったカトリック教会は、宗教組織でありながら、その活動は生活等の物質的支援に限定されたものである。一方、プロテスタント教会の活動は物質的支援に加え、集会という形での精神・宗教的支援を実施している。こうした両派の違いは、教義や組織理念等の違いから生じた可能性を持つとともに、プロテスタント教会はより外国人と宗教の関係性を重視した支援を展開したことが示唆される。

そして、こうした外国人と宗教の問題に向き合った支援は、行政の支援だけでは十分に手が回らなかった部分であった。それは、日頃から宗教的支援の経験を十分に有し、外国人が日常的に求める礼拝の場を提供する機能を備えた地域の宗教組織であったからこそ成し得られた活動であったといえよう。そこには、外国人支援における宗教組織の役割が示されている。

#### 〔参考文献〕

- 荻野剛史 2013 『『ベトナム難民』の『定住化』プロセス：『ベトナム難民』と『重要な他者』とのかかわりに焦点化して』明石書店, 172～180 頁
- A組織 1997 『A組織五〇年史—キリストのみわざをほめたたえて』A組織
- A組織 2020 『A組織七〇年史—イエスを見つめながら』新教出版社
- 久保忠行・瀬戸徐映里奈・乾美紀 2014 「日本の難民受け入れ経験を問いなおす：兵庫県姫路市の定住センターと難民キャンプの記憶から」『難民研究ジャーナル』第4号, 1～13 頁
- ジュマリ・アラム (2007) 「異文化理解の宗教学的アプローチ～『文化の三層構造』モデルを手がかりに～」『異文化研究』, 第1巻, 118～135 頁
- 白波瀬達也 2018 「カトリックにおける重層的な移民支援」高橋典史・白波瀬達也・星野壮・岡井宏文・荻翔一・徳田剛・永田貴聖・野上恵美・山本崇記 (編著) 『現代日本の宗教と多文化共生：移民と地域社会の関係性を探る』明石書店, 25～44 頁
- 高橋泉 2022 「在日外国人支援における宗教組織の貢献」『星槎大学大学院紀要』第3巻第2号, 17～32 頁
- 高橋典史 2018 「日本におけるインドシナ難民の地域定住と宗教の関わり—ベトナム難民の事例を中心に—」高橋典史・白波瀬達也・星野壮・岡井宏文・荻翔一・徳田剛・永田貴聖・野上恵美・山本崇記 (編著) 『現代日本の宗教と多文化共生：移民と地域社会の関係性を探る』明石書店, 67～88 頁
- 中野秀一郎 1993 「インドシナ難民—姫路定住促進センターの経験を通して考える—」中野秀一郎・今津孝次郎 『エスニシティの社会学—日本社会の民族的構成—』世界思想社 66～84 頁
- 長谷部美佳 2018 「中国帰国者、インドシナ難民に対する初期指導と課題」『移民政策のフロンティア：日本の歩みと課題を問い直す』移民政策学会設立10周年記念論集刊行委員会, 127～132 頁
- 大和市議会 1991 「大和市議会本会議 平成3年12月定例会 12月17日一般質問 大和市議会『大和市議会本会議議事録 平成3年第4回定例会』, 95～96 頁